

The Reminiscence of Exellia NG+1

三世、己をふいにして

作成レギュレーション

基本概要

- ・ 経験点：78500 点（新規）、85000 点（継続）
- ・ 資金：61000G（新規）、70000G（継続）
- ・ 名誉点：1500 点（新規）、1800 点（継続）
- ・ 成長回数：129 回

各種制限について

- ・ ヴァグランツ禁止、蛮族 PC 禁止
- ・ SW2.0 / 2.5 標準流派入門禁止、標準流派の秘伝の習得・使用禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限（宿り木の棒杖、楔石強化を除き全面禁止）
- ・ レベル制限 7～8
- ・ 成長回数が 10 以上のときの 60%以上の偏重割り振り（極振り）禁止

動画用の参考資料（Lap2-12 書き損じ含む）

アンドリアス（アンドリアス・フォン・ナヴァール）

読み上げ：未定

「進撃の巨人」の終尾の巨人がモデル。ただし、エレンの終尾の巨人より小さい（全長 500m 程度。元ネタの終尾の巨人は測定不能）。

星座の都合からミトロンになっているが、「絶もう一つの未来（FRU / RWF）」の「シヴァ・ミトロン / パンドラ・ミトロン」は関係ない。

“珖焰龍神”コズミック・キューサー（エクセリア神化体）

読み上げ：継星あかり

立ち絵なし。理由としては「新装版エクセリア」と立ち絵が変わらないため。

アストレイド・ピッカー

読み上げ：なし

フォージヴン・ディソナンスなど罪喰いとその特徴を同じくする（白、金、灰のような色合い）

イング＝シゲル

読み上げ：未定（資金的余裕があったら琴葉茜・葵）

アマルティア（SW2.0／2.5）とトライア・スコート（第2次Z／第3次Z）をニコイチしたような外見。要するに、狐面を被った和装のアマルティア。

穴開けの少年

読み上げ：たぶん AquesTalk

『少年期』の『エメトセルクの父親』、みたいなイメージ。

懐かしい気配（ヒュペリオン）

読み上げ：VOICEPEAK（弦巻マキ想定）

神話では男だが、こちらでは女。色合いを暖色（主に黄～橙）ベースにして天元突破させたラフト克蘭ズ・ファウネア（どういう見た目だ）。

クライヴ・ロズフィールド

読み上げ：未定（VOICEPEAKの水奈瀬コウ、またはフリモメンあたりを想定中）

このシナリオ時点で33歳。元はFF16の主人公。通称《シド》。

原作との違いとしては、「大罪人」ではない他、神の器たるミュトスではない（エクセリアがミュトスであるため）。が、初登場の13年前の『イフリート初顕現』時に、そうと気付かず弟とスマッシュブラザーズ（物理）した。

よって、弟（28歳）はめっちゃリハビリを余儀なくされている。

メモ群

NPC「イング＝シゲル」の命名規則

- ・全体：FF14（漆黒編）の友好部族「ピクシー族」と同じ
- ・具体的な命名理由：
 - ・イング…北欧神話の豊穡の神「フレイ」のことを指す。「豊穡」から転じて「活性＝闇」と解釈。
 - ・シゲル…太陽の象徴。「太陽＝光」と解釈。
- ・元の種族：アマルティア（『III』p.420、『ML』p.189）
本個体はその特殊個体となる。
- ・「かわいくて美しい我が枝フェオちゃん」の粹は別に存在（これ大事）

伝承録「浸食する異界」

その異界は、覇権を握るべく、この世界を蝕んでいるという。世界を蝕むことで、この世界への足がかりを形成していると噂になっている。

私もこの目で確かめたわけではないのだが、ところどころに、赤い岩と、溶岩が点在した『浸食域』に、世界を繋ぐ『門』が存在する。

しかしその『門』は欠損しており、補修には相応の素材が必要になる。

その素材を入手するには、とある獣竜種を砕く必要がある。

導入

生まれたての神

君達は、《暗魂の暁》の大広間まで戻ってきただろう。

戻ってきて早々、何やら騒がしくなっていた。

君達は聞き込みを行う必要がある。

聞き込み判定を要求された場合、その基準値は冒険者レベル+知力ボーナスであり、目標値は 15 である。

〔聞き込み対象の一覧〕

- ・ 船頭のデヴィッド
- ・ ジェシカ・サージェント・ナインテールズ
- ・ 鍛冶師のアンドレイ
- ・ 物売りのエミリア

船頭のデヴィッド

デヴィッド

「ああ、お前達も帰ってきたのか。少しばかり、重い問題に遭遇してしまっただけ」

(※GMメモ：RP待機)

デヴィッド

「ああ、少し言いづらいんだがな…、その…なんだ。

お前達なら、事の真相を肌身で感じているんじゃないか？」

君達は、デヴィッドを問い詰める必要がある。問い詰めることに成功したかどうかは、聞き込み判定を用いて判定をする必要がある。

(※GMメモ：「問い詰める」RP待機

失敗時は「会話スキップ1」までスキップ)

デヴィッド

「分かった！分かったよ…。先日、エクセリアが神性に目覚めただろ？だから、強制的な信徒にされるんじゃないか、と不安に思う奴らがいてよ…」

「なんせあいつは、悪名高き『コズミック・キューサー』のドミナントだ。天地がひっくり返れば、世界の理を焼き尽くすほどの悪鬼と化すかもしれねぇ…。それを嫌う連中が、今騒ぎ立ててるわけだ」

(※GMメモ：会話スキップ1)

ジェシカ・サージェント・ナインテールズ

ジェシカ

「やあ、お帰り。なんだか突拍子もない事態に巻き込まれたようだな」

(※GMメモ：RP待機)

ジェシカ

「帰って早々、私を訪ねてくるということは…君達は、この事態について大まかに気付いたということだな」

PC への選択肢

- ・気付いた、だって？
- ・なんのことかなー

ジェシカ

「とぼけるのもよくはないぞ。君達は…エクセリアの神化を目にしたはずだ。それによって生じた異常気象も、ね」

(※GMメモ：RP待機)

ジェシカ

「対象を見つめすぎると、全体像を見失うぞ。」

あいにく、今は君達に教えるほどのことは、あの異常気象ぐらいしかないが——よい機会だ。

あの異常気象について、かいつまんで話すとしよう」

そう言ってジェシカは、君達が目にしたであろう『異常気象』——『無尽光』について話し始める。

ジェシカ

「魔動機文明が滅びる 600 年前——蛮族の駆逐が進行したことで、世界から闇が消え、光が溢れる大災害が発生した。

溢れ出した光は、早期に鎮められたが…、その災害、《光の氾濫》の以降、その大災害を止めた『ある女性』と同じ力を持った女性が生まれるようになった」

(※GMメモ：RP 待機)

ジェシカ

「…その当代が、リーンだと聞くと…、エクセリアが言うには、12 年前に、その身に宿る『光の調停者』の力を我がものにしたそう。最も、彼女が本当に『光の調停者』の後継者なのかは定かではないそうだが」

鍛冶師のアンドレイ

君達がアンドレイ工房に行くと、アクセサリを作っている最中の彼がいた。

アンドレイ

「…永久氷晶のネックレスを作れと、言うのは易いが…全く、あのお嬢は…」

(※GMメモ：RP 待機)

アンドレイ

「…なんだ、用件を言え」

(※GMメモ：RP 待機)

アンドレイ

「確かに、周りが騒がしいが…それがどうかしたか？」

君達は、製作途中の〈永久氷晶のネックレス〉を見ることになる。

アンドレイ

「ああ、これが気になるか…。

リーンの奴、「最近できた友達に贈り物をしたいから」って、こんなものを素材として持ってきやがった。俺が扱えるのは楔石だと、口酸っぱく言っていたんだがな。

まあ、エミリアに「漢なら、女の頼みで、装飾品のひとつぐらい作って見せろ」と、ケツに火をつけられてな…。断るに断れず、作った次第だ。

もう少し時間はかかるが、できたらベルリオーズに仲介を頼むさ」

(※GMメモ：RP待機)

アンドレイ

「エクセリアの『神化』、か。お前さんがたは、知らないんだったな」

君達は、アンドレイに対して否定する必要がある。

否定することに成功したかどうかは、聞き込み判定を用いて判定する必要がある。

(※GMメモ：「否定する」RP待機

失敗時は「会話スキップ2」までスキップ)

アンドレイ

「この目でエクセリアが神になるのを見た？

…いや、お前さんがたが見たのは、あくまで『始まりの剣』の力を得ただけだ。

あいつは、元から神だったんだよ」

(※GMメモ：会話スキップ2)

アンドレイ

「エクセリアはな、火の時代を終焉に導いた…言うなれば、『終焉を齎す神』なんだよ」

(※GMメモ：RP待機)

アンドレイ

「エクセリアは《ロードランの旧き神たち》を討ち取った。だからこそ、『篝火世界に終焉を齎した神』として、古代世界への移行期では崇められていたんだ。だが、新たに現れた《小さな火》…。

《天使い》に言わせれば《真なる人》が、創造魔法を身につけたときから、あいつの神性は否定されるようになった。身を潜めるためか、あいつが黒いローブと赤い仮面をつけて俺のところにやってきたときは、正直堕ちたかと思ったよ」

「で、いざ蓋を開けてみれば、あいつは『魂の色』と『肉体の存在定義』だけで世界を見通していた。…あいつ、視界を失ってたんだ。勿論、あいつに文句をぶちまけたが…、以外とあいつ、ノリノリでな。『これが姉さんの視界か』って大はしゃぎしてた」

「聖女並に、あいつは『人間性』を溜め込んでいたんだろうよ…」

物売りのエミリア

エミリア

「…なんだよ」

…君達は、話しかけてもいないのに、エミリアに素っ気ない態度を取られた。

エミリア

「あいつ、視界がないのによくやるよねえ。

自分のしでかしを自分で拭うだけに飽き足らず、蘆田のオッサンから技術協力と補修を仰いで《隠れ家》を建て、あまつさえ神性すらも得たのだから」

PC への選択肢

- ・もしかして、嫉妬してる？
- ・エクセリアさんなら何ら不思議じゃないけど

エミリア

「…って、うわぁ！？お、お前達、いつからそこに！？」

「…なんだ、さっきかよ。ニコルが逝っちまってから、ずっと戦いばかりでご苦労様、としか言いようがないぞ。もっとも、私も、お前達を使いつ走りにしてやろうかなと考えていたころだ」

そう彼女が話し、手元の呼び鈴を鳴らすと、そこに 1 体の妖精が現れる。

????

「いくら依頼があるからといって、何の声かけもせず呼び出すなんて…。やっぱり、あなたは傲慢ですね、エミリア」

(※GMメモ：BGM「陽気な大騒動」)

…どうにも、その妖精は不服そうな顔をしている。
エミリアの視線が泳ぐ。

(※GMメモ：RP待機)

エミリア
「…助けて？」

PC への選択肢

- ・ いやなことわる！
- ・ あなたが招いた事態でしょうが

エミリア
「…救いはないかあ。イング、自己紹介」
イング＝シゲル
「妖精のイング＝シゲルと申します。以後お見知りおきを」

その表情は、如何にも悪戯好きと言うべきものだった…。

何者でもない者

岩盤を掘るような、<ruby>掘削用具<rt>ドリル</ruby>の回転音。
それが岩盤を貫くと同時に、そこから大量の水が溢れ出る。

水脈掘りの鉋夫
「水だあ！」
「出た出たア！ヒャッハアアア！」

ローブに身を包み、誰かを分らないようにしていた彼女は、降りかかる水を拭う。

水脈掘りの鉱夫

「この嬢ちゃんすげえぞ！あの硬え岩盤を一掘りだぜえ！」

吹き出る水を見て盛り上がる、現地の村人…特に、その村長が彼女——エクセリアに声をかける。

貧村の村長

「ありがとうございます。これで村も、水の心配をしないで済みます。なんとお礼を申せば——」

エクセリア

「花だ」

貧村の村長

「…え？」

エクセリア

「種を蒔いて、花を育ててくれ」

貧村の村長

「はあ…」

時は少し流れ、住宅地の最寄りの砂場。

そこで、ヤシの実に穴を開け、中の水を飲もうとする少年が、一生懸命にドリルを回していた。

エクセリア

「どうした、坊主？」

穴開けの少年

「うまく穴が開かないんだ」

エクセリアはそれまでの状況と、現状を鑑みて、ほんの数秒思案する。

エクセリア

「力を入れすぎだな。もっと、軽く回してみな」

穴開けの少年

「…こう？」

言われたとおりに、少年が軽くドリルを回すと、いとも容易く穴が開く。

穴開けの少年

「ほんとだ、すごいな姉ちゃん！」

エクセリア

「当たり前だ。私を誰だと——」

思っていやがる。そう言いかけたが、元気いっぱいにヤシの実の中の水を飲む少年を見て、言葉が音に変わらなかった。

穴開けの少年

「ぶはあ、うめえ〜」

エクセリア

「フッ…。いや、誰でもないか」

空を、『仮初の全能』を身につけたばかりの人々が舞う。——彼らの光が、夜空を照らした。

穴開けの少年

「見て、クロノスだ！また戦いに行くの？クロノスは勝つ？」

エクセリア

「…いいや。彼らは平和のために征く。仲間を作りに行くのさ」

穴開けの少年

「仲間？そっかー。…俺も行けるかなあー」

エクセリア

「…行けるとも。天の光はすべて星だ」

黒法衣に、赤い仮面をつけた彼女がそう言う。

新たな法的組織——十四人委員会の立ち上げのため、奮起する彼らを、地上から見上げていた。

エクセリア

「———そうだ、螺旋の友が待つ世界だ」

…その記憶を、今になって、彼女は思い出した。

それが夢であるかどうか…それは、ただ目を見開いただけでは分からない。

エクセリア

「…っ」

視界を埋め尽くしているのは、己が喰らい、溜め込んだ、おおよそ人が溜めうる量ではない———捧げられるはずだった者達の『人間性』。それを見たエクセリアは、その悍ましい、黒く蠢くそれを、直視しないように、一旦目を閉じる。

そのときに、ふと、彼女は声を聞く。

懐かしい気配

「君は、かつて希望を示してくれたでしょう？先へと進む彼らに、また託したらどう？」

暖かな陽のような、その声は…かつて、終末の災厄が世界を襲ったときに、エクセリア自身が、その意志で喰らった存在の声だった。

エクセリア

「…ややこしくなるから、亡霊らしく黙っていてくれ…。ヒュペリオン」

その声に応答するように、白く褪せたその瞳に、緋の光が灯る。

そこへ、彼女の使い魔が訪れる。

ベルリオーズ

「…ロード。リーンが永久氷晶のネックレスを作ってくれと」

エクセリア

「彼女の好きにさせてやれ。

それと、物作りの依頼は、私じゃなくてアンドレイに投げるように。私が、好き勝手にやっていいことじゃない」

それを聞き届けたベルリオーズは、巡航形態に遷移して飛び去っていく。

机の上には、一通の書簡が置かれていた。

——『龍姫公が脱走した』。自力では動けないように、神経を断ち切ってやったはずだが…、と反芻するが、アイツなら意地でも治癒させかねない…と思い返す。

エクセリアが抱える『宿題』は山ほどある。そのうちのひとつが…『螺旋の報い』と呼ばれる、終末の災厄以前の大問題だった。

——さて、追想の続きをはじめよう。

エクセリアが苦悩しているところに、君達が訪れる。

エクセリア

「なんだ、君達か。少し、頼まれごとがあるんだ」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリアはそう言って、〈永久氷晶のネックレス〉を手に出す。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「リーンがアンドレイに課した依頼を果たしてほしい。

彼女は、今は『憩いの広場』にいるはずだ」

そう言って、彼女は君達にそれを渡す。

…長い1日が、始まろうとしていた。

憩いの広場にて ～完成度不足～

君達は憩いの広場で悩むリーンを見つけることになる。

(※GMメモ：RP待機)

リーン

「…あ、冒険者さん。アンドレイさんに頼んだネックレス…は…」

そう言って、リーンは君の手元の〈永久氷晶のネックレス〉を見るだろう。

リーン

「…完成度、ちょっと足りないですね」

(※GMメモ：RP待機)

リーン

「まあ、無茶言っているとは思っていましたよ？でも…ガイアに渡すには、ちょっと…。ただ、ぱっと見ただけで概ね見当はついているので、ちょっと耳を貸してくださいね？」

そう言って、リーンは君達のうちの誰かの耳元に近づくだろう。

リーン

「…タングステン鋼で補強してあげないといけないんですよ」

君達は、タングステン鋼について知っているかどうか、判定を行う必要がある。

見識（セージ知識）or 冒険者+知力判定 目標値：19

成功時、それが魔動機文明時代に編み出された合金技術を用いた、あのヴァルマーレでも再現は困難を極める合金であることが分かる。

(※GMメモ：RP待機)

リーン

「冗談じゃないんですよ、それが。」

確かに、その当時の技術を用いることはできませんが…代替となる方法があります。

途方もない高温に晒せば、タングステン鋼の再現は簡単にできます」

「たとえば…地獄にいるじゃないですか。よく『ポテト』と表現されるアレが」

可愛い見目で言っているが、とてもそのような発言ではないとだけ言えるだろう。

そもそもこの世界はマイクラフトではない。それを求められても、アンドレイは入手法を知らないので困る。

(※GMメモ：RP待機)

そうこう話していると、そこへふらりと壮年の男が現れる。

????

「苦心しているようだな」

リーン

「あ、《シド》さん！」

シド、と呼ばれた男のもとへ、しかめっ面のエクセリアが詰め寄る。

エクセリア

「クライヴ・ロズフィールド…。来るなら先に話をつけてほしかったなあ？」

クライヴ

「いだいはいだい！このタイミングでアイアンクローは痛い！」

…君達の足元で、ガクガクと震えているアルテマがいた。

(※GMメモ：RP待機)

アルテマ

『…やっぱり、エクセリアは怖いな』

…少し間を置いて、エクセリアは悩む。

エクセリア

「…タングステン鋼を作るためのタングステンと鋼鉄…。

それを作るための高炉と、それを動かすための熱源、か…」

クライヴ

「俺が顕現すれば、熱源は確保できるんじゃないのか？」

エクセリア

「確かに、イフリートほどの熱量があれば、確かに相応の温度は確保できるが…。設計図を見るに、あの巨躯をしまい込めるほど、うまくできちゃいないぞ…？」

(※GMメモ：RP待機)

クライヴ

「だが、ネザーなんて次元に、どうやって行くつもりだ？まさかとは思うが…」

エクセリア

「そのまさかだ…。現状、あそこへ行く方法を知っているのは…アルテマだけだろう」

アルテマ

『悪いがネザーは管轄外だ』

自慢げに言い切ったところに差し込むように、アルテマが言葉を発する。

それを聞いた君達は、戸惑いの影響で黙ってしまうだろう。

エクセリア

「…つまるところ、用件をざっと並べると…『〈永久氷晶のネックレス〉の完成にはタングステン鋼が必要』で、『タングステン鋼を作るには高い熱を発生される高炉が必要』で…。『タングステン鋼を作り上げることができる高炉を作るためには相応の熱源が必要』で…。『熱源になり得る《ポテト》を捕獲するには《ネザー》へ行く必要』があり…。『《ネザー》へ行く方法を探す必要』がある、というわけだ…」

ダン、とエクセリアは机を叩く。

エクセリア

「《ネザー》へ行く方法が、現代に残っているとは到底思えないぞ、この野郎！」

頭を抱えるエクセリアを尻目に、アルテマが君達に話しかける。

アルテマ

『…学士に聞いたらどうだ。我、ネザーの知識なぞ、からっきしだぞ』

学士の私室にて

君達は、学士の私室に入った。

スチュアート

「どうしたんだい？」

(※GMメモ：RP待機)

スチュアート

「…浸食する異界、ネザーか…。分かった。ここの書庫を整理してみるよ」

そう言って、スチュアートは南に陳列された本棚を整理し始める。…君達は、北の本棚を見る必要があるだろう。

文献（セージ知識）判定 目標値：19

成功するまで、この判定は繰り返すことができる

スチュアート

「なにか見つけたのかい？」

（※メモ開示：伝承録「浸食する異界」）

（※GMメモ：RP待機）

スチュアート

「浸食する異界によって現れた門と、その門を修復する方法か…。こちら、門の開け方について、見当がついたところだ。…火打石と打ち金、持っていくといい。おそらくは、門を修復した後に使うはずだよ」

君達は、〈異界を繋ぐ火打石〉を手に入れた。

異界へ

君達は、入手した情報を以て、エクセリア達の元へ戻る。

（※GMメモ：RP待機）

エクセリア

「門を修復しないと、そこへは行けない訳か…」

クライヴ

「だが、赤い岩と溶岩のある『浸食域』なんて、俺も見たことはないぞ？…どうするつもりだ、エクセリア？ここには、飛空艇なんて贅沢なものはないぞ？」

(※GMメモ：RP待機)

深くため息をついた後、エクセリアは考えたことを言葉として紡ぐ。
それを聞いたクライヴは困惑した。

クライヴ

「顕現はそんな易々と使っていいものじゃない」

エクセリア

「だけど、可能性があるのはそれだけだ…。上空から探した方が楽とも言える…」

そう言って、エクセリアは部屋を出ようとする。

エクセリア

「…支度をしてくれ。行くなら、さっさと行くぞ」

コンテンツ解放：焼滅異界 ネザー要塞

焼滅異界 ネザー要塞

フレイディアの東より延びる、エフェメラル参道。

そこは、龍刻政府が祭事を執り行う際に使われる、神々の地へと続くとされる道だ。それ故に、この道は『参道』の名がついている。

この参道の上空を、偽りの神の、祝福もなき私が、さも当然のように飛び続けている。

しかし、神聖さをもたらすその名前とは裏腹に、その道は地獄に続いていた。

エクセリア

「…顕現状態で進めるのは、ここまでみたいだな。召喚獣の力を、ここから先は維持できそうにない」

エリア 1：エフェメラル参道・漆黒の道

君達には関係のない話だが、エクセリアが魔法を使おうとすると、そもそも光が少し出るだけで、明らかに発動している様子がなかった。

エクセリア

「この領域は《黒の一帯》というわけだが…、その性質上、魔物はいないはずだ。」

…私が知っている『理』で動く魔物は、な」

PC への選択肢

- ・エクセリアさんが知っている『理』？
- ・それってどういう…？

君達の問いに、エクセリアが答える暇もなく…敵が現れる。

8本の腕に、6本の脚を持つ異形の巨人。

それが生み出したゴーレムと相対する。

敵：チタンブロンズゴーレムx2、ヘルデュエラー・サブリングx1

君達は、魔物を討ち倒した。

崩れ落ちたゴーレムの破片を拾い上げたエクセリアは、それをじっくりと観察する。

冒険者+知力判定 目標値：19

成功時、エクセリアの目が青く光っていることに気付く。

エクセリア

「賢銅鉱…？なんでこんなものが、この世界に…？」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「どうした？なにか変なことでも言ったか？」

とぼけたエクセリアを目にしたとき、君達はなんとなく、追及しても無駄であるように感じた。

道を進むと、そこには巨大な…獣がいた。

エクセリア

「碎竜だって…！？にしたって、この身の毛がよだつ魔力は…」

君達を一瞥した獣は、怒り狂ったように唸った。

敵：ブラキディオス・ダイヤモンド

君達はそれを討伐した。

エクセリア

「異界と現世を繋ぐ『門』の素材か…」

そうエクセリアが呟くと、目の前の門に目を向ける。欠損はたった一箇所。そこに紫の発光と共に亀裂が入っているのが見えた。エクセリアはその門の補修に取りかかろうとするが、そこに魔力が奔る。持っていたはずの『門の素材』が消え、亀裂にあてがわれる。

そして、その魔法は…エクセリアには心当たりがありすぎた。

エクセリア

「これは…強制転移の魔法だと！？はぐれないように気を付けろ！」

エリア 2：赤き異界

強制転移により、君達は異界に誘われる。そこには、腐った豚人が大量にいたが、彼らは君達を感知できていないのか、近寄ってこなかった。

エクセリア

「これが…異界ネザー、なのか…？」

そこに、耳を劈く邪な声が響く。

ホクトクラフト

『来やがったな大罪人。我が意志、骨身に刻め』

敵：ヘルデュエラー・スケルトン×3

ホクトクラフト

『ここまでしても、お前達の意志を打ち消せぬと！

ならばいいだろう、貴様らが積み重ねた罪の数だけ、地獄を示してくれる！』

君達の眼前の広場に、黒い靄が現れる。
そこから現れたのは、名状しがたき化け物だった。

敵：エピメサテュロス

神の悪戯

君達は、エピメサテュロスを撃破した。
そのエピメサテュロスが、崩れ落ちるように、複数体の炎の化身へと変化する。
確かに、彼の化身が纏っている棒状の炎は、『ポテト』という形容が正しいと言えた。

(※GMメモ：RP待機)

ふと、君達がエクセリアを見ると…なぜかケージを振り回して、その炎の化身を捕らえていた。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「魔法生物を殺した場合、熱源としては弱いからね。さて…ボイラー用も含めて捕獲することができた。帰るとしよう」

彼女の提案により、現世へと帰ることになった。
エクセリアは、その異界を見て、人知れず呟いた。

エクセリア

「…この異界…。一体、誰が作り上げたというんだ」

顛末

その後、色々あったものの、アンドレイは無事に〈永久氷晶のネックレス〉を完成させることに成功した。

アルテマ

『まともな魔法を使うことができないこの場所で、よくここまでの高温を要する金属の加工を成功させたな』

エクセリア

「エーテルが足りずとも、マナや集中力が欠けることはない、ってことだ」

関心を隠しきれないアルテマに対し、エクセリアはそのように語る。

そして2日後、その〈永久氷晶のネックレス〉を、リーンの友人である少女、ガイアに渡したという。

報酬

経験点

- ・ 基本：2000 点
- ・ インスタンスダンジョン報酬：3000 点

資金

- ・ リーンの我が儘：2000G
- ・ 黒曜石は砕けない：5000G
- ・ インスタンスダンジョン報酬：2000G

名誉点

このシナリオに名誉点報酬はありません。

成長回数

- ・ 基本：8 回